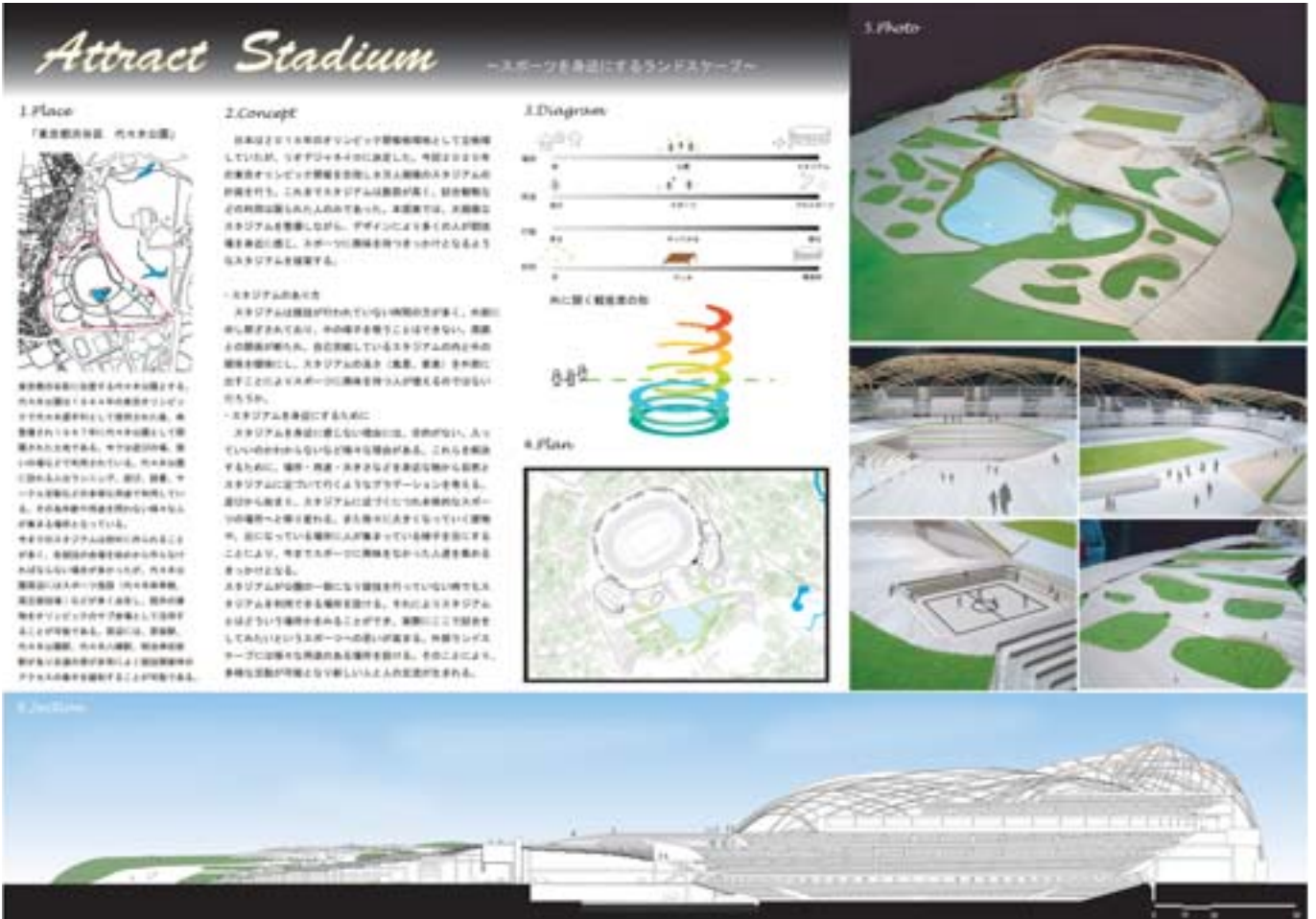




Attract Stadium スポーツを身近にするランドスケープ

黄金井 美穂 (こがねい みほ)
東京電機大学 情報環境学部 情報環境学科



・スタジアムのあり方

スタジアムは競技が行われていない時間の方が長い公共施設である。外部に対し閉ざされており、一般の人が中の様子を覗くことはできない。周囲との関係が断たれ、自己完結しているスタジアムの内と外との関係を曖昧にし、スタジアムの良さ（風景、要素）を外に出すことによりスポーツに興味を持つ人が増えるのではないだろうか。

・スタジアムを身近にするために

スタジアムを身近に感じない理由には、目的がない、入っていいのかわからないなど様々な理由がある。これらを解決するために、場所・用途・大きさなどを身近な物から自然とスタジアムに近づいて行くようなグラデーションを考える。遊びから始まり、スタジアムに近づくにつれ本格的なスポーツの場所へと移り変わる。

また徐々に大きくなっていく建物や、丘になっている場所に人が集まっている様子目にするにより、今までスポーツに興味をなかつた人達を集めるきっかけとなる。

スタジアムが公園の一部になり競技を行っていない時でもスタジアムを利用できる場所を設ける。それによりスタジアムとはどういう場所かをみることができ、実際にここで試合をしてみたいというスポーツへの思いが高まる。

外部ランドスケープには様々な用途のある場所を設ける。そのことにより、多様な活動が可能となり新しい人と人の交流が生まれる。

講評

この作品はアクセスが良い代々木公園に、これまでの競技中心だけではない、市民が身近に感じ解放されたオリンピックスタジアムの提案であるが、直接提案者の作品に込めた思いを聞けなかったのが残念であった。競技用のトラックと中央フィールド、それを取り巻く客席の閉じた陸上競技場の1面を解放し、公園のような多様なアクティビティを連続させることで、スポーツ観戦だけではなく公園として常時利用可能な施設として提案した興味深い作品である。日常の市民の憩いの場と同時に、競技場の客席へアプローチとして公園をダイナミックな演出の場としても活用できること等十分評価できる。一方で真剣勝負の競技や試合や良好な競技の場を提供する維持管理に対する配慮も必要で、本来の競技場としての施設と解放された公園のような施設としての使い分けに対して、移動する客席や装置等を利用した施設提案でも面白かったと思われる。構造技術者から見れば、北京オリンピックスタジアムの影響と思われる樹状フレームの屋根架構については、コストパフォーマンスの悪い単純梁架構の採用には疑問が残るところである。
(審査委員：古川 洋)